

「時代が求める意識改革」

農林水産省畜産試験場 場長 山下良弘



私などには懐かしい思いがする「田舎の香水」は、今やとんでもない悪臭とされる。そんな言葉自体、死語になってしまったように、もはやユーモアとして寛容される事態ではないということだろう。昔は、山深い田舎まで行かなくても、人畜のふん尿を畑に撒き、そこそこで家畜の姿を目にすることができた。そんな情景を人々が抵抗なく受け入れ、そこではまた、完全な循環型農業が営まれていたわけだ。

今では、家畜の姿が見えるだけで「臭い、汚い」といわれることも珍しくない。そして、ほとんどの家畜が畜舎の中の人目に触れないところへ隠されてしまった。

この数十年間に、わが国の畜産の生産構造は急変した。その結果、畜産食品は日常食に無くてはならない不動の位置を確保し、伝統的な日本の食生活さえ変えてきた。一方、畜産業は日常から疎んじられ疎外されるという、全く逆の状況になっている。

食料・農業・農村問題調査会でも論議された、わが国の異常ともいえる低い自給率を高めるために、「和食」の見直しが言われている。石油ショック時の自給率54%に戻すために、米の消費を3割増やし、輸入原料に依存して生産されている肉類を半減、油脂類を3割減らす必要があるという。

あるべき論のようなもので食習慣が変えられるとは思わないし、体位の向上や長命化、食の豊かさの実現に貢献してきた畜産物消費を簡単に減らしていいとも思わないが、畜産業のあり方については、この産業に関わるものとして、率直に反省すべき点が多いことも事実である。

特に、飼料の海外依存とふん尿問題への対処が緊要である。ここではふん尿問題に限るが、関係者間では「畜産環境問題」という用語を使っている。しかし、「環境」では幅広すぎて、問題をあいまい化し逃げの姿勢と見られかねない。実態はまさしく「畜産公害問題」であり、責任は回避できないのだということをしつかり認識して対処する必要がある。

冒頭に述べたような、家畜が低密度で分散していた昔のような状態に今さら戻ることはできないが、循環型農業の再生については、その成否が畜産業の将来を握っているといっても過言ではないだろう。

出したふん尿を公害源にしないこと、そのために、ふん尿の再資源化を確実に進めること、処理技術ばかりでなく、給与する飼料や飼養管理を含めた畜産技術全般について徹底的に検証し、新たな循環型畜産の再構築を図ることが必要である。その結果、経営内の各部門へ投入する資金や労力の配分を変える必要もあるだろうし、生産性も多少犠牲にせざるを得ない場合も出てこようが、「成熟期の日本型畜産技術」、はやりの言葉で言えば、「持続的畜産技術」を確固なものにすることの方を優先すべき時代である。

この改革を促すには、経営評価の見直し、すなわち、従来の計数評価に環境評価を加える必要がある。環境評価の手法及び規準は新たに開発する必要があるだろうが、経営を持続するために環境コスト負担は避けられないことを明確にする。さらに、環境評価は畜産経営内ばかりでなく、例えば、良く発酵管理されたふん尿堆肥を周辺の畑作農家が利用し、畑地からの環境負荷が軽減された場合、それも畜産経営評価のプラスにカウントするといった外部効果を考慮することが、農家の意欲を高めるためにもぜひ必要である。

これからの畜産経営者には、ふん尿を「忌み物」にするのでなく、経営にも環境にもメリットのある畜産産物として活用し、家畜もふん尿も経営の看板として自信を持って人前に出す、という意識変革が求められている。